上方洒落本における罵りの助動詞

-『異本郭中奇譚』（1772）を中心に-

村中 淑子
桃山学院大学
tmuranaka@andrew.ac.jp

A Study of Auxiliary Verbs of Cursing in Sharebon
: Focusing on "Kakuchu Kitan" Which Was Published in Osaka

MURANAKA Toshiko
St. Andrew's University

Key Words: Sharebon Corpus, Edo Period, Kansai Dialect, Translation between Dialects

要旨

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』を用いて，近世の日本語における罵りの助動詞を検索したところ，全般にはさほど多くの出現があったわけではないが，その中で１作品あたりの罵りの助動詞の数・種類ともに他より多かったのが，大坂板洒落本『異本郭中奇譚』であった．大坂板洒落本『異本郭中奇譚』は江戸板洒落本『郭中奇譚』が改作（翻訳・翻案）されたものである．そこで，江戸板における助動詞ヤガルが大坂板では他の助動詞に置き換えられたという仮説を立て，罵りの助動詞の出現文脈を観察した．結果としては，置き換えも見られたが，置き換えではなく別の文脈で罵りの助動詞が使用されるケースが目立った．セリフや小さなエピソードを加え、談話構成を改めることで上方らしい面白さを増す工夫を施した結果として，罵りの助動詞が他の上方洒落本よりも多く出現した可能性がある．

１．はじめに

人々の言語生活を総合的に考える上で，人が人を言語上でどのように扱っているかを表示する待遇表現のありさまを知ることは欠かせない．プラス方向の待遇表現と同様，マイナス方向の待遇表現も重要であるが，後者については研究がまだ少ないようである．そこで，マイナス方向の待遇表現の一種である「罵りの助動詞」の使用状況について，地域と時代を絞りつつ，調べを進めている．村中（2019）では，近世末大坂の滑稽本「穴さがし心の内そと」を用いて，ヨル（オル）・ヤガル・クサル・ケツカル・サラス・テコマス・テヤルの状況を見た．村中

（2021）では，明治・大正期大阪落語 SP レコード文字化資料を用いて，ヨル・ヤガル・クサル・ケツカル・サラスの状況を見た.

本稿では，近世を通した状況をみる．今まで調べた時代よりも少しだけ遡ることになる．調べるにあたり，２つの段階を設定する．第１段階として，国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』（略称 CHJ）を用いて検索し，近世の罵りの助動詞の出現傾向を見る（第２章）．第２段階として，第１段階で罵りの助動詞が多く見られた洒落本の１作品について概要を確認し，先行研究をみた上で仮説を立て（第３章），罵りの助動詞の出現文脈を検討する（第４章）．その結果を受けて考察し，結論づける（第５章）.

２．歴史コーパスの検索

２．１　調査方法と対象

国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』（略称 CHJ）を，コーパス検索アプリケーション「中納言」によって検索した．検索は次の条件と手順によった.

・時代：「室町」「江戸」にチェックを入れて検索した.
・検索単位：「短単位」で「語彙素」による検索をした.
・検索項目：「やがる」「上がる[1]」「腐る[2]」「けつかる」「こます」「さらす」を「語彙素」として設定した.

手順のそれぞれについて説明する.

まず時代については，『日本語歴史コーパス』は「奈良」「平安」「鎌倉」「室町」「江戸」「明治・大正」に分かれており，それぞれにチェックをつけ外しして別々に検索することが可能である．本稿では，近世を浚ってみるために「室町」「江戸」にチェックを入れた．室町時代の資料としては狂言集とキリシタン資料，江戸時代の資料としては洒落本，人情本，近松浄瑠璃，随筆・紀行がそれぞれ収められている[3].

検索を「短単位」の「語彙素」で行ったのは，今回のような動詞由来の助動詞はその方法でほぼ適切に検索できそうだったからである．検索対象によっては，「短単位」での設定ができず，「文字列検索」をしなければ語形を洗い出せない場合があるが（例えば〜チックのような外来語由来の接辞など），今回はその必要はなさそうであった.

項目を上記の６つに設定したのは，近世の日本語における，罵りの助動詞の代表と見なせると判断したからである．近世の日本語の口語表現あるいは待遇表現についての記述は，湯沢（1936）・湯沢（1954）と山崎（1963）・山崎（1990）が詳細であり代表的なものである．この２人の先達の研究から，罵りの助動詞にあたる部分を拾い出すと，表１のようにまとめることができる．縦軸を時代の流れとし，横軸を地域（上方と江戸）とした.

表１　近世前期・後期の罵り助動詞（上方と江戸）

	出典	上方地域	出典	江戸地域
近世前期	湯沢（1936）	オル，クサル，ケツカル，コマス[4]，ヤガル		
	山崎（1963）	オル，クサル，ケツカル，コマス，アガル		
近世後期	山崎（1963）	オル，ヨル，クサル，ケツカル，コマス，サラス，ヤガル，アガル	湯沢（1954）	（オル[5]，）ケツカル，ヤガル
			山崎（1990）	オル，ケツカル，ヤガル

以上，湯沢幸吉郎と山崎久之の研究から，近世の上方および江戸のことばにおける罵りの助動詞として，オル・ヨル・クサル・ケツカル・コマス・サラス・ヤガル・アガルがあることがわかった[6]．このうち，オルとヨルについては，今回は扱わない[7]．本稿ではクサル・ケツカル・コマス・サラス・ヤガル・アガル[8] の６項目を扱うことにする．

２．２　調査結果

『日本語歴史コーパス』（CHJ）の「室町時代」「江戸時代」を検索した結果，罵りの助動詞６項目の出現数は表２の通りであった．

表２　日本語歴史コーパスにおける罵りの助動詞の出現数（近世）

	虎明本/狂言（上方）	近松浄瑠璃（上方）	洒落本（上方）	洒落本（江戸）	人情本（江戸）	計
ヤガル			5	36	39	80
アガル	1		4		3	8
クサル			16	1		17
ケツカル		7	6		4	17
サラス		1	2			3
コマス	1	1	13			15
計	2	9	46	37	46	140

表２をみると，江戸語の資料ではヤガルがほとんどを占めることがわかる．

一方，上方語の資料では，ヤガルもあるがそれ以外の語も使われている．上方語の三種の資料のうち，虎明本狂言ではコマスとアガルが１件ずつ出現するのみだが，近松浄瑠璃にはケツカル・サラス・コマスが出現し，洒落本にはヤガル・アガル・クサル・ケツカル・サラス・コマスの６種類ともが出現する．狂言，浄瑠璃，洒落本という資料の性質が異なるために様相が異なったという可能性もあるが，近世の上方では罵りの助動詞が徐々に発達し，場面による使い分けが生じたという可能性も考えられる．

次に，これらの中から洒落本と人情本に絞って，罵りの助動詞が具体的にどの作品にいくつ出現したかを表３に示す．▲は江戸板洒落本，◆は人情本，無印は大坂板か京都板の洒落本である．作品名の後の数字で，出現数を示した．縦軸は刊行年を示す．

表３　洒落本および人情本における罵りの助動詞の出現

	コマス	サラス	ケツカル	クサル	ヤガル＋アガル
1750-	新月花余情 2			陽台遺編・妣閣秘言 5	
1760-					▲郭中奇譚 6
1770-	異本郭中奇譚 3 風流裸人形 1	異本郭中奇譚 2	異本郭中奇譚 2 無論里問答 1	異本郭中奇譚 1 ▲南閨雑話 1 風流裸人形 3	異本郭中奇譚＋1 ▲侠者方言 7 ▲南閨雑話 2 ▲甲駅新話 9 ▲深川新話 1
1780-			短華蘂葉 1		▲総籬 7
1790-				阿蘭陀鏡 3	▲仕懸文庫 4 阿蘭陀鏡 1＋3
1800-	南遊記 1 嘘之川 2		昇平楽 1 竊潜妻 1	南遊記 1 嘘之川 1	
1810-					
1820-	粋の曙 1 箱まくら 1 色深狭睡夢 2		◆明烏 3	粋の曙 2	粋の曙 1 ◆明烏 7 色深狭睡夢 3
1830-			◆花廼志満台 1		◆仮名文章 2 ◆梅児与美 10 ◆辰巳園 7 ◆恋の花染 2 ◆花廼志満台 1＋3
1840-					
1850-					◆連理の梅 6
1860-					◆江戸紫 4
計	13	2	10	17	80＋7

（＋の後ろはアガルの数）

罵りの助動詞が２種類以上出現した作品名に，下線を付けた．表２で見た通り，江戸語の資料はヤガルに集中していることがわかる一方で，表３では，上方語資料のどの作品に複数の罵り助動詞が出現したのかがわかる．コマスとクサルが出現したのが「風流裸人形」「南遊記」「嘘之川」，クサルとヤガルもしくはアガルが出現したのが「南閨雑話」「阿蘭陀鏡」，コマスとヤガルが出現したのが「色深狭睡夢」，ケツカルとヤガルもしくはアガルが出現したのが「明烏後の正夢」「花廼志満台」，コマスとクサルとヤガルが出現したのが「粋の曙」，そし

てコマス・サラス・ケツカル・クサル・アガルの５種類が出現したのが「異本郭中奇譚」（網掛けを付した）である．

このように，「異本郭中奇譚」は，他の洒落本と比べて，出現する罵りの助動詞の種類が明らかに多い．また他の洒落本には現れないサラスが出現する点で目立つ．さらに，出現する罵りの助動詞の種類が多いにもかかわらず，ヤガルが出現していない点にも注目したい．ヤガルは江戸語資料に多い語形ではあるが，京都板「阿蘭陀鏡」，大坂板「粋の曙」，大坂板「色深狭睡夢」に出現しており，上方語資料も現れうる語形なのである．

以上のことから，「異本郭中奇譚」には他の洒落本にはない，何らかの特殊な性質があるのではないかと考えられる．実は，「異本郭中奇譚」は「異本」という名の通り，異本ではない「郭中奇譚」が存在する．表３の右上，「ヤガル＋アガル」の欄の一番上に，「郭中奇譚」があり，ヤガルが６つ出現したことがわかる．

『日本語歴史コーパス』が底本とした洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』（1978-88，中央公論社）[9] の第４巻で「郭中奇譚」と「異本郭中奇譚」の解題を執筆した中野三敏が述べる通り，大坂板洒落本「異本郭中奇譚」は，江戸板洒落本「郭中奇譚」が改作（翻訳・翻案）されたものであるようだ．となれば，「異本郭中奇譚」の性質を知るには，「郭中奇譚」との比較分析を行うことが有効だと考えられる．

そこで，次章では「郭中奇譚」「異本郭中奇譚」を概観し，「異本郭中奇譚」に関する先行研究をみることにする．

３．「異本郭中奇譚」について

３．１　「郭中奇譚」と「異本郭中奇譚」の構成と内容

ここで「郭中奇譚」と「異本郭中奇譚」の構成と内容を概観する．

「郭中奇譚」（江戸板）は「序・船窓笑語・弄花巵言・掃臭夜話・秋」から成る．一方，「異本郭中奇譚」（大坂板）は「序・弄花巵言・掃臭夜帖」から成る．

「序」は，江戸板・大坂板のいずれも「当世男ありけり」で始まり，「いとなまめいたる・・すみけり」「ここちまどひにけり」「しのぶずり」「たれゆえに乱れ・・我・・」「・・の人はかくいちはやき・・をなんしける」「ねもせで夜をあかし」等の，伊勢物語の引用・パロディを散りばめつつ，遊郭で遊女と風流に遊ぶ男がいることを紹介する．

「船窓笑語」は，江戸板のみであり，大坂板ではまるごと削除されている．内容は，「やそ」と「とめ」という２人の芸者が旦那や太鼓持ちと一緒に船遊びをしながら，噂話や悪口・からかいなどを言い合うものである．軽い味わいの短い章であり，落語でいえばマクラにあたるようなものであろうか．大坂板にはこの章がない代わりに，次の「弄花巵言」が，より長く展開される．

「弄花巵言」は，「花紫」という名の太夫とその客，および周りの人々（遊郭の主人や数人のかむろ[10] 等）をめぐる章である．「郭中奇譚」「異本郭中奇譚」のいずれにおいても，中心となる章であると思われる．すなわち一番長い章であり，また「花紫」の名前はいずれの「序」

でも紹介されているのである（「春日屋の花紫といへるあいかたにかぎりしられずのぼり出して」）．「弄花巵言」は，客が遊郭にやってくるところから始まり，かむろや主人たちも交えての会話があった後，客と太夫花紫の２人の場面となる．太夫が悋気を起こし，手紙をひったくって噛んだり，客に恨み言を言ったり，つねる，くすぐる，胸ぐらを掴む，押さえつける，などの痴話喧嘩を繰り広げる．そこに他の遊女もやってきて会話した後，また太夫と客の２人になり，一晩を過ごし，客は帰っていく．大坂板の方が長いが，大筋は同じであり，セリフには重なる部分が多い．

「掃臭夜話」と「掃臭夜帖」は，いずれも夜鷹（＝惣嫁[11]）と馴染み客の１対１の会話で始まり，途中から夜鷹＝惣嫁は退場して，なじみ客とその知り合いの男同士の遠慮のない会話に移行する．江戸板・大坂板ともに，「弄花巵言」よりもずっと短く，やや猥雑な雰囲気で，がらっぱちな人々を描いたものである．人物の名前が異なっており，江戸板は「熊さん」（でばの熊）と「宗八」（あばの宗八），大坂板は「太兵衛」（てんぽの太兵衛）と「長兵衛」（腕の長兵衛）である．また終わり方が異なる．江戸板は，２人とも銭がなくてどこにも行けないと忌々しがるところで終わるのだが，大坂板は江戸板よりもやや長い会話があり，２人で尺八と歌を合わせたり，うどんを食べながら埒もない話をするところで終わる．

「秡」は江戸板のみで大坂板にはない．漢文仕立ての数行のごく短いものである．内容は，女郎に真情は無いものなので，これを「郭中奇譚」というのであり，粋人ならわかるだろうという説明になっている．

３．２　「異本郭中奇譚」に関する先行研究と本稿における仮説

大坂板洒落本「異本郭中奇譚」に関する先行研究には，矢野（1976），増井（1994），北﨑（2015）がある．いずれにおいても，大坂板洒落本「異本郭中奇譚」が江戸板洒落本「郭中奇譚」から改作（翻訳・翻案）されたものであることが言及されている．

矢野（1976）は，「比較的口頭語を忠実に反映している様にみえる洒落本」の「口頭語的写実性を検討するための方法論」を述べたものであり，４つの角度からの検討が提案されている．４つの角度のうちの一つが，「上方板洒落本の言語現象と江戸板のそれとの比較」であり，江戸板と上方板で相違する言語現象が当時の上方語を反映している可能性が大きいという．そして，「同一内容の話を上方と江戸とで出板した洒落本どうしの比較」を２組紹介している．江戸板が上方板に書き換えられたとされる「郭中奇譚」組と，逆に上方板を江戸板にまとめ直したという「月花余情」組である．扱われている語項目は，「郭中奇譚」組については，シャル・ナンス，「連用形＋ネエ」の命令表現，「連用形＋ンス」，自称詞ワッチ，促音便とウ音便，ダとジャ，「月花余情」組に関しては，ナハルとナンス，であった．

増井（1994）は，「郭中奇譚」の一部である江戸板「掃臭夜話」と大坂板「掃臭夜帖」の対応部分の言語表現を抜き出し，29 項目にわたる比較表を作成して，矢野（1976）が扱わなかった部分を指摘している．「か→じゃないかいな」「ゑい→よい」，「こよふ→こふ」，「から→よって」などである．

北﨑（2015）は，「郭中奇譚」組と「月花余情」組のそれぞれの改作部分を文単位で対応づけて対照コーパス構築を試みたというもので，テキストの構造とコーパス構築の手順を中心に述べられている．具体的な語彙の改変については，「ばか→あほ」，シャルの回避，ウ音便などが例として挙げられている．

管見の限りでは，「郭中奇譚」の江戸板と大坂板を比較した研究は以上の３本であったが，いずれにおいても，罵りの助動詞についての言及はなかった．そこで，本稿では，「郭中奇譚」の江戸板と大坂板において，今までに行われていないとみられる罵りの助動詞の比較を行うことにする．

比較にあたっては，江戸板「郭中奇譚」が大坂板「異本郭中奇譚」に改作される際に，次のことが起きたのではないかという仮説を立てる．

仮説1：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，江戸語のニュアンスのあるヤガルが避けられた．

仮説2：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，ヤガルが上方語のニュアンスのあるアガルに取り替えられた．

仮説3：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，上方語のニュアンスを濃くするために，サラス・クサル・ケツカル・コマスが用いられた．

上記の３つの仮説に基づき，議論を進めていくために，次章第１節では，江戸板「郭中奇譚」のヤガルの出現箇所が大坂板「異本郭中奇譚」ではどうなっているか，第２節では，逆に，大坂板「異本郭中奇譚」のサラス・クサル・ケツカル・コマス・アガルの出現箇所が江戸板「郭中奇譚」ではどうなっているか，をそれぞれみていくことにする．

４．「異本 郭中奇譚」と「郭中奇譚」の罵り助動詞の比較

４．１　江戸板の罵り助動詞の出現箇所は，大坂板ではどうなっているか

江戸板「郭中奇譚」における罵りの助動詞は全てヤガルであり，その出現箇所は６箇所であった．「郭中奇譚」の「序・船窓笑語・弄花巵言・掃臭夜話・秋」のうち，ヤガルが出現するのは全て「掃臭夜話」の部分である．

以下，作品中の出現順に見ていく．注目する語項目の部分に二重下線を引く．「郭中奇譚」の例文を [1][2]…で，「異本郭中奇譚」の例文を (1)(2)…で示す．用例の後ろの括弧内は，作品名と刊行年，『洒落本大成』における巻号とページである．注目する語項目を含むセリフと，それに対応するセリフの単位で取り出すことにする．

【ヤガル 1】

[1]
夜鷹：ゆふべはどふしなさッた　外にゑいのができたか
熊　：ナニサこよふとおもツたがアノじやんこめが ふぐ喰にあいべと　いひやがツたから 内にねたア　はなしのよふなこツた

（郭中奇譚1769・4-308）

(1)
惣嫁　：夕部は見へなんだなあ　北の方や南の方みてゐたけれど　外によいのかてきたかへ
太兵衛：なんのいそんなこつちやない夕べおらこふと思ふたけれど腕の長兵衛めが 砂場へうとんくひにいこほとに内にまつてゐよといひ上つたよつて うせるかとおもふてきよろりとまつていたけれどとう／＼きさらさいでけたいくそてついねた ゑらひつぼじや

（異本郭中奇譚 1772・4-326）

「いひやがツたから」が「いひ上つたよつて」となっており，「言いやがった」の部分はヤガルがアガルに置き換えられている．理由を表す接続助詞のカラがヨッテに置き換えられていて，ほとんど直訳と言ってよい．ヤガル以外の前後の台詞の流れには違いがあるが，それについては後で触れる．

【ヤガル 2】

[2]
熊　：イヤ下駄でおもひ出した　アノお六めに兵蔵めが下駄で首だけほれやがツた
夜鷹：そうだとサ

（郭中奇譚1769・4-308）

(2)
太兵衛：いやあのさつま杉の六めに源七めがくびだけいてけつかる
惣嫁　：そじやげななあ

（異本郭中奇譚 1772・4-326）

「首だけ惚れやがった」が「首だけいてけつかる」になっており，ヤガルがケツカルに置き換えられている．大坂板には「下駄で」がなく，「惚れる」という動詞もないが，直前の流れは同じであるので，意味は同じと見てよいだろう．すなわち，この直前の部分で，客が下駄を買った話をしたのに対して，夜鷹がいつもより背が高く見える，と応じ，客がこれはいい下駄だと自慢して，夜鷹が自分の下駄は減りが早い，と言う流れは全く同じなのである．

【ヤガル 3】

[3]
熊　：おらもあいつはゑゝぞ
夜鷹：ハアヽソリヤアノ　だアがよ
熊　：あごたたゝきやアがると鼻ツぱしらちりけへたゝき出すぞ

（郭中奇譚1769・4-308）

(3)
＜該当箇所なし＞

（異本郭中奇譚1772・4-326）

この[3]は，[2]の直後のセリフである．江戸板では客（熊）が夜鷹をおどすように話す中でヤガルが出現するのだが，大坂板ではそのような内容ではなく，客（太兵衛）のセリフは，女に惚れた源七を止めたというような内容で，罵りの助動詞が出てこない．

【ヤガル ４】

[4]
熊　：アレアノ北のほうから義太夫うなツてきやがるはだれだ　アヽ宗八めだワイ 宗八やアい／＼
夜鷹：ナニサあれじやないマツト脊がひくいはづだ
（郭中奇譚1769・4-308）

(4)
惣嫁　：あれ／＼北のはうから 上るりかたつてくるはそふじやないかいな よふにたこゑじやぞへ
太兵衛：いや／＼ありやそふじやない 長兵衛めがこゑはもつとおつがひらいてある
（異本郭中奇譚 1772・4-326，327）

ここは江戸板と大坂板でセリフの話者が逆になっている．いずれも，義太夫（浄瑠璃）を唸りながら近づいてくるのが誰なのか，と言うセリフがあるのだが，江戸板では，客である熊が言うところを，大坂板では惣嫁の方がそれを言うのである．江戸板の「うなってきやがる」は男性である熊が知り合いの宗八を軽く罵るセリフなのでヤガルが使われているのであろう．大坂板の惣嫁の「語ってくる」は，長兵衛と知り合いではあるが（「よう似た声」と言っている），罵る関係ではない，少なくとも惣嫁は熊の前で長兵衛を罵るような人間関係ではないと見える．つまり大坂板でヤガルが使われなかったのは使用人物が異なることが理由であると考えられる．

【ヤガル ５】

[5]
熊　：材木の影で見へない．うしやがツたら さきへいツたといツてくれろ
夜鷹：どこへ行なさる
熊　：清三けづりに
夜鷹：はやくかへりなさい
（郭中奇譚1769・4-308）

(5)
太兵衛：ほんにこれやとうしさらす事しやしらぬこゝへ来たらのヲ さきへいたといふてくれそろ／＼いこわい
惣嫁　：見へたらそふいを もとりにへこれ どこへも道よりなんすなへ
（異本郭中奇譚 1772・4-327）

この[5] (5)は，[4] (4)の直後の部分である．江戸板の方では，義太夫を語りながら歩いている人間が誰であるか見えないが，もしここに来たら先に行ったと伝えろ，と夜鷹にいうところで，「うしやがったら」という．つまり見えないがおそらく宗八であると決めて，宗八を軽く罵る表現としてヤガルを使っている．大坂板の方では，浄瑠璃を語って歩いてくるのは長兵衛ではないと言いながら，もしここに来たら先に行ったと伝えろと言っているところは江戸板と同じ

である．「ほんにこりゃどうしさらすことじゃ知らん」と言っているのは，直前で長兵衛の声ではないと言いながら，どうも長兵衛であるようだと思い直して，「長兵衛は一体どうしたことだろう，よくわからない」と言っているのであろう．つまりかなり変形した形ではあるが，ヤガルをサラスに置き換えていると見ても良いところではある．

【ヤガル ６】

[6]
熊　：ホンニゆふべナ清助めが角との酒屋で何やら立テ引しやがツたそふだワイ
宗八：ナンダ立引だコリヤもゝ引が聞イてあきれるワイ　あいつも此ごろ仕合がわるいかしてげへにさぶそうだナ
（郭中奇譚1769・4-308）

(6)
＜該当箇所なし＞
（異本郭中奇譚1772・4-327）

この前の部分で，江戸板では宗八が「熊やあい」と呼びかけ，大坂板では長兵衛が「太兵衛やあい」と呼びかける．そこから二人の会話が始まるのは同様なのだが，話の内容が全く違っている．江戸板では翌日の晩に会があるので一緒に行こうと誘った後，[6]のように共通の知り合いらしい「清助」の悪口を言い，目的地についたが二人とも銭がないので引き返すところで終わる．大坂板では，尺八を隣に預けていた話，その隣の女房の話，尺八と歌を合わせる，店に着いてうどんを注文する，その店の女の話，という流れになるので，該当する箇所（知り合い男性への悪口）が見当たらない．

４．２　大坂板の罵り助動詞の出現箇所は，江戸板ではどうなっているか

大坂板「異本郭中奇譚」では，「弄花巵言」にクサル1件，コマス2件，「掃臭夜帖」にアガル1件，サラス2件，ケツカル2件，コマス1件，が現れる．これらを，なるべく語形をまとめる形で，出現順にみていくことにする．４．１と同様，「異本郭中奇譚」の例文を(1)(2)…で，「郭中奇譚」の例文を[1][2]…で示す．注目する語項目の部分は網掛けを付し，それに対して同じでなくても意味的・場面的に対応しそうな部分に下線を引く．用例の後ろの括弧内は，作品名と刊行年，『洒落本大成』における巻号とページである．

【クサル １】

(1)
清の　　：よいきみの
客　　：またあいつひいきしをるさて／＼残念な事
太夫花紫：ちとそふも御さりましよコレ清野わがみはのもふ内へいんでそれいひ付て置た事しや
客　　：早ふいにくされ
太夫花紫：こんなけがらはしい物はといふてかんだ文ふすまのもとへ捨る
（異本郭中奇譚 1772・4-318）

[1]
柴木　　：よいきみの
客　　：またあいつがひいきしおる
女郎花紫：まだそこにいやるか其屏風こツちへ引よせていてねや
客　　：早くねるホンニあきれんすによウ
女郎花紫：コンナけがらわしい物はといふてかんだ文ふすまへなげる
（郭中奇譚 1769・4-303）

大坂板では，客（「浦」という名の男，上層の若い通人）が太夫と二人きりになりたいためであろう，「清の」というかぶろ（かむろ）に「早う去にくされ」（早く向こうへ行け）と言っている．江戸板の該当箇所では，場面の流れはほぼ同じなのだが，客はかむろに特に話しかけてはおらず，太夫に向かって「早く寝る」と言うだけである．

【コマス 1】

(1)
太夫花紫：そんならよひわいな　わしが仕様が有る東屋す御まへも手伝て御くれなさんせふたりしてこそぐつてこまそ
客　　：そりやおれがきんもつじやあつちへにげて行ぞ
東屋　　：どりやよかろさあ／＼
客　　：おおおおこんとはほんのかんにんじや　はなしてくれ／＼さても／＼じゆつない事いきつぎにも一つ其盃此よふに夜ぶかしをしてなぶりものに成つてはあすの身がたまらぬ
（異本郭中奇譚 1772・4-322）

[1]
女郎花紫：ばからしいわなよい／＼しかたが有嶋之助さん手つだつてくれなんしそれそちらの手を持なんしな
客　　：ををををこそぐつたいはなせ／＼ゆる／＼とおがむ／＼扨ゝじゆつないこつたいきつぎに一盃のもう此やうに夜をふかして其上もちあそびにされてあすの身がたまらぬ
（郭中奇譚 1769・4-305）

大坂板では，太夫が同僚（東屋）に，客を懲らしめるために，一緒に「こそぐってこまそ（くすぐってやろう）」と誘っている．しかし江戸板では，「手伝ってくれなんし」と頼んでいて，「こそぐる」の動詞が使われず，コマスの語は出てこないし，それにあたる「〜てやる」も出てこない．「こそぐる」の動詞は現れないが，次のところで客が「おおおお」と叫び，「こそぐったい」と言っているので，一緒にくすぐる行動をとったのは，大坂板と同様であろう．

【コマス 2】

(2)
東屋　　：そりやそふとわたしももふいのとふ／＼こよひはみへなんだ
花車[12]大：まあよふ御ざります御遊びあそばせ
客　　：はてまあ／＼よいわいな今夜はもふこんわいなあすはぜひくるじやあろ
東屋　　：こんどあふたらねちてこまそ

客　　：ぜひ御帰りか
東屋　：あす見へる時御まへもおいでへ
客　　：同道いたそ
東屋　：左様ならゆる／＼御遊びまた明ばんさんじましよ
客　　：そんならあすのばん
東屋　：これからいんであすねだつてやる文をかいて
客　　：これ／＼一首入れておやりなされ来ぬ人を・・・＜続く＞
（異本郭中奇譚 1772・4-322）

[2]
嶋之助　：モウおやすみなんせわツちも文ひとつかいてねよ
女郎花紫：マアエイハナあそびなんせ
客　　：どふあツてもおかへりかソンナラわざとたちませぬ
嶋之助　：おさらばヱ行く
女郎花紫：（小用に立チかへりてたばこすいつけゆする）
（郭中奇譚 1769・4-305,6）

これは上の(1)の直後に続く部分である．大坂板では，太夫が客をくすぐって懲らしめるのを手伝った遊女「東屋」が「もういの（もう去ろう）」と言うのだが，実際はなかなかこの部屋から去らず，自分の客が来なかったことを愚痴り，今度その客が来たら「ねちてこまそ（言いがかりをつけて物をねだってやろう）」と言う．その後も，東屋と太夫の客との会話は続き，明日も一緒に会う話をしたり，東屋が書く文に客が助言したりする．

一方，江戸板も上の[1]の直後なのであるが，大坂板の東屋にあたる遊女嶋之助が立ち去ろうとすると，花紫が一応止めようとして「まあええわな，遊びなんせ」と言うが，客が帰らせるセリフ「どうあってもお帰りか」を発して，嶋之助はあっさりと立ち去る．つまり嶋之助が自分の客のことを愚痴る部分がないので，「ねちてこまそ」に相当する部分が出てこないのである．嶋之助は「文一つ書いて寝よ」と言っており，おそらくは自分の客に出す手紙で，もしかしたら何かをねだる手紙かもしれないが，文章中には，誰に対するどんな文かは出てこない．

【コマス　3】

(3)
長兵衛：尺八をとなりへあづけておいて取によつたれば留主でからにげんさいめが一ぺんさがして居てはてる事じやなかつた
太兵衛：あいつは一切くへるなあどふやらすきそふな顔じや
太兵衛：おら一番いがめてこましたい
長兵衛：さあなんぞうたへ竹にあわそ
太兵衛：また雲にかけはしか
長兵衛：さあなんなとやれ（／＼といふて尺八をしやにかまへ吹出す）
（異本郭中奇譚 1772・4-327）

[3]
＜該当箇所なし＞
（郭中奇譚 1769・4-308）

これは「掃臭夜帖」の一節である．４．１のヤガル６(6)＜該当箇所なし＞の部分にあたる．太兵衛の「いがめてこましたい」は，その前の太兵衛のセリフ「あいつは・・どうやら好きそう

な顔じゃ」に続くものであり，この「あいつ」は長兵衛が尺八を預けていた隣家の女房のことである．「いがめる」には，「ちょろまかす」とか「女を自分のものにする」といった意味があるので，「いがめてこましたい」を直訳すると「ものにしてやりたい」となろうか．要するに，太兵衛は，長兵衛の隣家の女房と一度浮気がしたい，と言っているわけである．４.１のヤガル６の部分で述べたとおり，江戸板の方では，熊と宗八の会話としてそのような内容が全く出てこない．

【サラス １】

(1)
太兵衛：なんのいそんなこつちやない夕べおらこふと思ふたけれど腕の長兵衛めが砂場へうどんくひにいこほどに内にまつてゐよといひ上つたよつて うせるかとおもふてきよろりとまつていたけれど とう／＼きさらさいでけたいくそて ついねたゑらひつぼじや

（異本郭中奇譚 1772・4-326）

[1]
熊：ナニサこよふとおもツたがアノじやんこめが ふぐ喰にあいべと　いひやがツたから 内にねたア　はなしのよふなこツた

（郭中奇譚1769・4-308）

これは４．１のヤガル１と同じ箇所である．どちらも，昨夜来なかったのはなぜか，と街娼に尋ねられて答える部分で，大坂板の「いひ上つたよつて」と江戸板の「いひやがツたから」が対応するのだが，大坂板はその後が長くなっている．太兵衛が，うどんを食べようと誘ってきた長兵衛をうちで待っていたが来なかったという部分で「とう／＼きさらさいでけたいくそてつい寝た（とうとう来なくて忌々しくて，思わず寝た）」と，長兵衛が来なかったことを罵っている．

江戸板の方では，知り合いが食事に誘ってきたという情報はあるが，その相手が来なかったという情報がなく，したがって罵ることもなく，ただ「うちで寝た」と言っているだけである．

【サラス ２】

(2)
太兵衛：いや／＼ありやそふじやない 長兵衛めがこゑは もつとおつがひらいてある ほんにこれやどうしさらす事じやしらぬ ここへ来たらのを さきへいたといふてくれ そろ／＼いこわい

（異本郭中奇譚 1772（4-327）

[2]
熊：材木の影で見へない．うしやがツたら さきへいツたといツてくれろ

（郭中奇譚 1769・4-308）

これは４.１のヤガル５と同じ箇所である．そこでも述べた通り，変形されてはいるが，ヤガルがサラスに置き換えられたとみてもよいだろう．

【ケツカル １】

(1)
惣嫁　：そんな事かへそして今夜いきなんすか
太兵衛：おお今よつたらそこらぞめいてそろ／＼さきへゆけててぬかした それでぞめきもつて出かけて来たこらまあなにしてけつかるしらぬあたぶのわるいがきじや

惣嫁　：そんなら見よぞいなちよつとはいりなんせんか
太兵衛：どふでもどりによろぞ
惣嫁　：そんなら勝手になんせこんやはお月さんがよふさへさしやつた
（異本郭中奇譚 1772・4-326）
[1]
夜鷹：そりやおきのどくやはいのあたま
熊　：なんのこつたいばかつつらな
夜鷹：ちよつとへへりねへ
熊　：けえりによるべえ
夜鷹：今夜はお月様がよくさへさしやつた
（郭中奇譚 1769・4-308）

これはサラス１の直後の箇所である．大坂板では，太兵衛が長兵衛を罵っているところである．つまり前の部分で長兵衛からうどんを食べに誘われたのにすっぽかされた話があり，その続きで「ぬかした（言った）」「あたぶの悪いがきじゃ（なんとも忌々しい奴だ）」のような長兵衛に対する罵り表現と共に「何してけつかる（何してやがる）」のセリフが出現する．

江戸板の方は，「ばかっつらな」という表現で熊の忌々しさを表しているが，これはその直前部分の，フグを食べ損なってうちに居たことを指した忌々しさのように思われる．つまり大坂板とは忌々しさの対象が異なっている．

【ケツカル ２】

(2)
太兵衛：いやあのさつま杉の六めに源七めがくびだけいてけつかる
惣嫁　：そじやげななあ
（異本郭中奇譚 1772・4-326）
[2]
熊　：　アノお六めに兵蔵めが下駄で首だけほれやがツた
夜鷹：そうだとサ
（郭中奇譚1769・4-308）

これは４.１のヤガル２と同じ箇所である．そこでも述べた通り，ヤガルがケツカルに置き換えられたものとみられる．

【アガル １】

(1)
太兵衛：なんのいそんなこつちやないタベおらこふと思ふたけれど腕の長兵衛めが砂場へうとんくひにいこほとに内にまつてゐよといひ上つたよつてうせるかとおもふてきよろりとまつていたけれどとう／＼きさらさいでけたいくそてついねた ゑらひつぼじや
（異本郭中奇譚 1772・4-326）
[1]
熊：ナニサこよふとおもツたがアノじやんこめがふぐ喰にあいべと　いひやがツたから内にねたア　はなしのよふなこツた
（郭中奇譚1769・4-308）

これはヤガル１と同じ箇所である．そこでも述べた通り，ヤガルをアガルに直訳したものと考えられる．

５．考察

４章で考察してきた内容をまとめると次のようになる．

江戸板「郭中奇譚」の罵り助動詞はヤガル6件であり，それは大坂板「異本郭中奇譚」では次のようになっていた．

【ヤガル１】　ヤガル→アガル（置き換え）
【ヤガル２】　ヤガル→ケツカル（置き換え）
【ヤガル３】　ヤガル→無し　（客が街娼を罵る会話の部分がなくなっている）
【ヤガル４】　ヤガル→無し　（内容は同じだが，客でなく街娼のセリフになったため）
【ヤガル５】　ヤガル→サラス（置き換え）
【ヤガル６】　ヤガル→無し　（知り合いの悪口を言う部分がなくなっている）

大坂板「異本郭中奇譚」の罵り助動詞クサル・コマス・サラス・ケツカル・アガルに該当する「郭中奇譚」の元の箇所を見ると次のようであった．

【クサル１】　クサル←無し（江戸板にはない，客がかむろを追い出そうと話しかける箇所が，大坂板には設けられている．）
【コマス１】　コマス←無し（太夫と遊女が客をくすぐる場面は同じだが，動詞「こそぐる」が元には無い．つまり江戸板にはない，太夫が相手に働きかける自分の動作を描写するセリフが，大坂板には加えられている．）
【コマス２】　コマス←無し（遊女が立ち去ろうとする場面は同じだが，遊女のセリフが増えている．つまり，江戸板にはない，遊女が自分の客に働きかけるつもりの自分の動作を描写するセリフが，大坂板には加えられている．）
【コマス３】　コマス←無し（江戸板では，男同士が他の男の悪口を言うだけの場面であるが，大坂板では，隣家の女房の話が出てきて，そこでコマスが使われる．その後店の女の話も出てくるところから，大坂板が男同士の無駄話が長い様子を描写しているとも言えるし，あるいは，下世話な話好きの様子を描写しているとも言えるだろう．）
【サラス１】　サラス←無し（江戸板の方が簡単に済ませているところを，大坂板では詳しく描写している．すなわち，自分がひどい目にあったことを詳しく話す中で罵りのサラスが出てくる．）
【サラス２】　サラス←ヤガル　（ヤガル５と同じ）
【ケツカル１】　ケツカル←無し（江戸板が簡単に済ませているところを，大坂版では詳しく描写している．すなわち，江戸板では触れていないその日の知り合いのことを罵っている．）
【ケツカル２】　ケツカル←ヤガル　（ヤガル２と同じ）

【アガル１】　　アガル←ヤガル　（ヤガル１と同じ）

以上のことから，３章で立てた仮説については，それぞれ次のように考えられる．

仮説1：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，江戸語のニュアンスのあるヤガルが避けられた．

これはおそらく正しいと思われる．他の罵りの助動詞に置き換えられたり，そのセリフを語る人物が入れ替えられて罵りの助動詞を使えなくさせたり，していた．ヤガルを避けたとみてよいだろう．

仮説2：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，ヤガルが上方語のニュアンスのあるアガルに取り替えられた．

部分的には正しいと思われる．ヤガルがアガルに置き換えられた例が1件あった．ただし，アガルだけでなく，ケツカルに置き換えられた例が1件と，サラスに置き換えられた例が1件あった．直訳ではなく，文脈を変形させているケースもあった．

仮説3：「郭中奇譚」を「異本郭中奇譚」に改作する際，上方語のニュアンスを濃くするために，サラス・クサル・ケツカル・コマスが用いられた．

これも正しいとみて良いと考える．ただし，上方語のニュアンスを濃くするためにそれらの罵りの助動詞を使ったという直接的な関係ではなく，上方風（大坂ふう）の談話の流れにしようと工夫した結果，罵りの助動詞を使うことになったというのが正しいかと思われる．すなわち，客がかむろに話しかける部分が追加されたり，太夫や遊女が相手に働きかける自分の動作を描写するセリフが追加されたり，下世話な無駄話や自分の体験を詳しく話す部分が追加されたりしているのである．

『洒落本大成』（1978-88，中央公論社）で解題を執筆した中野三敏は，「郭中奇譚」について，「板式からみて江戸板の方が遥かに整っていることは確か」であり，上方板は，「板下に不揃いの点が目立って」と述べる．また，「内容の点でも，江戸板の文章を引延ばし，間延びさせたような部分が多く，上方板が江戸板の改悪であることは間違いない．」とまで断言している．

確かに，印刷の形式については中野の述べる通りなのであろう．しかし，内容については，必ずしも，中野の言をうのみにはできない．すなわち，「間延びさせたような」印象があるかもしれないが，それは，上方の談話の特徴を表している可能性があると考えられるのである．

６．おわりに

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』を用いて，近世の日本語における罵りの助動詞を検索し，罵りの助動詞の数・種類ともに他より多かった大坂板洒落本「異本郭中奇譚」について，改作元の江戸板「郭中奇譚」と比較しつつ分析した．

江戸板における助動詞ヤガルが大坂板では他の助動詞に置き換えられたという仮説はある程度当てはまる結果となった．しかし，単に助動詞を置き換えるのではなく，大坂ふうの談話の流れになるように改作した結果，さまざまな罵りの助動詞が使われる結果になったのではないかと考えられた．

【注】

---

1) 『日本語歴史コーパス』においては，罵りの助動詞「～あがる」と本動詞「上がる」の語彙素が同じ「上がる」であり，品詞も同じ「動詞・一般」となっているため，「風呂から上がり」（天草版伊曽保物語）や「二階に上がりける」（近松）や「おひとつお上がりなされませ」（洒落本・郭中奇譚）のような本動詞の例と「何しに来あがった」（洒落本・花廼志満台）のような助動詞が混じって検索される．そこで語彙素「上がる」の検索結果 475 件から本動詞の用例を目視で取り除くと，残りは 8 件であった．

2) 『日本語歴史コーパス』においては，罵りの助動詞「～くさる」と本動詞「腐る」の語彙素が同じ「腐る」であり，品詞も同じ「動詞・一般」となっているため，「根性の腐った」（近松）のような本動詞の例と「嫌味を言いくさる」（洒落本・阿蘭陀鏡）のような助動詞が混じって検索される．そこで語彙素「腐る」の検索結果 24 件から本動詞の用例を目視で取り除くと，残りは 17 件であった．

3) 奈良時代の資料として万葉集・宣命・祝詞，平安時代の資料として和歌集，物語，日記等，鎌倉時代の資料として説話集，随筆，日記，紀行，軍記等，明治・大正の資料として雑誌，教科書，小説，新聞，等が収められている．

4) 湯沢（1936）によれば，「お参らする」が転じて「おます（る）」となり，ここから「こます（る）」が出たのであろうか，意味は同じ，とのことである．

5) 湯沢は，ぞんざいなニュアンスを持つオルは上方風の言い方であって，江戸では一般人が広く用いることはなかったようだ，という．

6) もちろんここでは上方と江戸のことばしか扱っていないので，他の地方には他の罵りの助動詞があっただろう．

7) 村中（2021）で扱った落語資料で出現したヨル 47 件のうち，実際の語形はオルであったものが１件だけ含まれていたが、ヨルとの機能上の違いが特にないものであった（「蛸は目覚まして顔なぜよと思いおって・・スカタン食いよる」）．しかし今回の洒落本資料においては，ヨルとオルを同一視できないケースが見られたため，別に考察の機会を設けたい．

8) 村中（2019）ではヤガルとアガルの用例がそれぞれ 1 件ずつ出現したが，数える場合に特に分けることはしなかった．村中（2021）ではアガルが出現しなかった．今回は，アガルが一定数出現したため，ヤガルと区別して数えることにした．

9) 『洒落本大成』（1978-88，中央公論社）は全 30 冊に及ぶ大規模な翻刻本文の叢書で，日本語史研究上頻繁に利用されているとのことである．洒落本は，江戸時代後期の江戸語・上方語が描

写された会話文を含む文学作品で，同時期の重要な口語資料とされている．内容は遊郭での遊びを描くものであり，通人・半可通・若者などの客やさまざまな段階の遊女，太鼓持ちなどが主な登場人物である．

10) 「かむろ」とは，太夫などの上位の遊女に仕えて，見習いをする6，7歳から13，4歳くらいまでの少女．「異本」では「かぶろ」となっている．

11) 「夜鷹」も「惣嫁」も，江戸時代の，路上で客引きをする最下級の娼婦を指す語である．惣嫁が上方語であるようだ．

12) 「花車」とは，遊女を指図する女，あるいは揚屋・茶屋の女房のこと．

【参考文献】

北﨑勇帆，2015，「洒落本を対象とした東西対象コーパスの設計と構築」『情報処理学会研究報告』vol.2015-CH-106(5): 1-6.

国立国語研究所，2021，『日本語歴史コーパス』（バージョン 2021.3，中納言バージョン 2.5.2） https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/ （2022 年 3 月 21 日確認）

増井典夫，1994，「近世後期上方語研究の課題――近世後期名古屋方言を視野において」『淑徳国文』35: 47-64.

村中淑子，2019，「「穴さがし心の内そと」における罵り表現について――助動詞・補助動詞を中心に」『現象と秩序』10: 21-38.

村中淑子，2020，『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院.

村中淑子，2021，「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」『現象と秩序』14: 45-63.

洒落本大成編集委員会（解題は中野三敏），1979，『洒落本大成』４，中央公論社.

山崎久之，1963，『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院.

山崎久之，1990，『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院.

矢野準，1976，「近世後期京坂語に関する一考察――洒落本用語の写実性」『国語学』107: 16-33.

湯沢幸吉郎，1936（1982 再版），『徳川時代言語の研究　上方篇』風間書房.

湯沢幸吉郎，1954（1957 増訂版参照），『江戸言葉の研究』明治書院.

＊＊

【編集後記】『現象と秩序』第 16 号をお届けします．この度，「『現象と秩序』を複数の WEB サイトに掲載する公示（オプト・アウト機会の保障の公示）」をいたしました．今後，本誌を複数の WEB サイトで掲載していくということに関する公示です．詳しくは本誌 91～92 頁をご確認いただき，本件にご了承いただけない著者の方は，2022 年 8 月末日までに下記「現象と秩序編集企画室」までお申し出ください．なお，お申し出のない場合は，ご了承いただけたものとさせていただきます．

さて，今回もスポーツ社会学や言語学等,多様な分野の専門家からご寄稿いただきました．

第１論文は，パラリンピック選手のとあるポスターに記された「障害は言い訳にすぎない」という文言をめぐるディスコース分析です．機能的クラス分け制度のあり方を中心に，いまだ残る課題についても論じられています．

第２論文は，看護師を“辞めた”人びとのキャリア形成に関するインタビューとその分析です．いかに，かれらの人生に看護師経験が生きているかを丁寧に考察しています．

第３論文は，ある高齢者が，アマゾン社のエコーショーという機械（その中には「アレクサ」というＡＩ［人工知能］が棲んでいます）を用いて，遠隔地にいるお孫さんと交流する実験のときに何が起きたか，のビデオ・エスノグラフィーです．「支援」というものの難しさ，「学習」をモニターするということの困難がものの見事に描かれています．教育社会学の成果としても読むことができるでしょう．

第４論文は，「郭中奇譚」（江戸板）と「異本郭中奇譚」（大坂板）における罵りの助動詞を比較・分析したものです．方言を意識した置き換えのみならず，その地方ならではの内容への改訂の結果，複数の罵りの助動詞が使用されるようになったようです．

今回もぜひご堪能ください．　(H.Y.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2021 年度）
編集委員会委員長：堀田裕子（愛知学泉大学）
編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学），　中塚朋子（就実大学）
編集幹事：川上陵哉（神戸市外国語大学）
編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第 16 号　　2022 年　3 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4
神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX）078-794-8074（樫田研），　e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848
ONLINE ISSN　：2188-9856
http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html